

卒業・修了 にあたって

学部 ——— 卒業

大学生生活四年間に打ちこんだこと

総合科学部 高橋悦子



バンドのメンバー

私はリック・スタイナーである。いやロックギタリストである。この四年間は、バンド活動に力をいれてきた。メンバーと、「カッコいいロックバンド

になる」ことを誓いあい、日々練習にはげんでいる。週に三、四日集まって、眉間にシワよせつつ、演奏したり曲をつくったりする。月に一、二回のペーシング・ライブ(お客の前で演奏すること)をするが、この日は朝から Banning・Heart・Spirit になる。どはな衣装と化粧でサイケデリック風にキメキメにして、ステージに上がり演奏にどつぶりのめり込んでしまうと、あたまの中からいろんなことが吹んでゆく(キレるともいう)。

はつきりいって、うちのバンドはヘタもいーところであるが、県外で演奏したり、ゆるめいプロバンドと一緒にイベントに出演させてもらったり、チャンスに恵まれてきた。それですっかりいい気になって、四月からは上京してプロをめざすことにする(多分)。

From April in 1988 to March in 1992

文学部 山田幸次郎

昭和六三年四月入学以来、私自身、広島という土地で様々な、そして貴重な体験をしてきた。時には苦闘を強いられ、ある時には奔放に豪快に戯れてもみた。しかし今、人生の転換期を迎えている。

何がだか解らず何とか生き延びようと必死に過ごした一年次。自由な身を満喫し始めた二年次。仲間と共に学部キャンパスに尽力した三年次。追われる時間に苦しめられた四年次。その他、社会勉強と人並みの生活を与えてくれたアルバイト。自分を試せたアメリカ旅行など、これら全てがもう、デイズニールランドを後にした瞬間の如く、「夢の時間」と化そうとしている。悲しくも、名残惜しくもある。ただこの四年間は自分をよくよく見つめ直せた時期でもあった。友人と切磋琢磨し、これからの長い行程へ向けての基礎を確立してきたとも思っている。



第6回文学部生キャンプ(於:芸北町聖湖) 各班長と63スタッフ

出会うことは行動すること

教育学部 松浦利幸

人と人の出会い。これはごく自然なことかもしれない。しかし、私はこの大学生生活で「出会う」ことがいかに貴重

これからが本当の勝負。有意義な四年間を充実した人生への糧としていき、これまでの親の投資に応えていきたいと思っている。

重で、不思議なものであるかを強く感じたのである。大学には全国各地から様々な人間が集まる。そして、それぞ



ゼミの皆でヨットに乗った時の写真
被写体はゼミの看板3人娘

期待に胸を大きく膨らませ、この大
学に入ったのが四年前。もう何十年も
前のことのような気がする。辛い受験

いよいよ卒業!!

学校教育学部 高藤 るみ

三年の後期からゼミが始まり、二、
三人ずつ一人の先生につき、卒論に向
けて本格的に勉強(?!?)し始めた。し
かし私の入ったゼミでは勉強もした
が、よくみんなで遊びにも出かけた。
秋にはテニス大会、冬にはスキー、夏
にはヨットで海等、先生を始め先輩方
と一緒にとても仲良く遊んだ。いや正
確には遊んだと言うより、遊んでいた
のだと言った方が正しいかもしれない。
今思い出しても、思わず吹き出し



第10回教育学科会宿(教々合宿)での昭和63年度入学生

れの間が独自の個性を持っているか
ら面白い。高校までは、同じ地で生ま
れ育ち、同じ方言に慣れ親しんで活動

を共にした友人達がいた。大学では、
その枠を超えたより幅広い出会いが
あった。何かそういう人達との出会い
が、新鮮であり楽しくもあった。私の
場合、出会いは行動力から生まれると
考える。授業や卒論指導、学科行事の
企画運営、サークル活動、アルバイト、
教育実習、そして旅行や遊びの中で出
会いは生まれ、膨らみ、横のつながり
と、年齢を超えた縦のつながりも出会
いを興味深くさせた。東千田から西条
への移転の中にも新しい出会いはあつ
た。私達、昭和入学最後の学生が卒業
していく。社会人生活にはどんな出会
いが待っているのだろうか。

熱く燃えた夏の日々

法学部 岸本 芳宣

てしまうようなことがたくさんある。
「馬鹿なことをしたな」と思うが青
春のページだと思えば、大変いい経
験ができたと思う。三年、四年の大学
卒業という大きな節目を前にした現
在、これから訪れる社会人としての生
活への期待と、終止符の打たれる学生
生活への未練とが交錯して、何とも不
思議な気分を味わっている。
そんな過ぎていく学生生活の中で強
烈に印象に残っているのは、水泳に熱
く燃えた日々のこと。中でも試合の華、
リレーの決勝。

生活後半は、前半に比べてまた違った
意味で充実していた。
卒業してしまうのがちよっぴり寂し
いと思う今日この頃である。
一気に興奮のプールサイドへ。そのと
きの緊張感は、何というか身震いがす
るほど心地よいものであった。
現役を引退した今も、時々練習に参
加しているし、バイトで子供達に水泳
を教えている。不思議なものである。
それだけ強烈な思い出なんだろう。熱
く燃えたあの夏の日々は、TVで甲子
園なんかを見ると夏の日々を思い出
し、輝く太陽の下に涼しげに横たわっ
ているプールを見て、血を騒がせてい
る自分は一生変わらないだろう。



中四国大会のメドレーリレーで
優勝した時のもの

トライすること

経済学部 河田 浩

“I won't forget you”三年前の春、私は二週間近く共に過ごしたフィリピン国立大学(U.P.)の学生に泣きながら別れをつ



バリ島のビーチで、インドネシア、マレーシア、スイスの学生と

げ、マニラ国際空港を後にした。思えばこの体験がその後の私の活動の原動力になった。

一年生の春、私は所属しているアイセックというサークルで行っているフィリピン—日本親善旅行に参加しました。ホームステイ、観光、ガーデン・パーティなどの楽しい経験だけでなく、参加した日本各地の大学の先輩そしてUPの学生から前向きな姿勢、トライする心の大切さを教えられました。そのことはそれまで消極的だった私にとって大きな刺激になりました。

この経験をバネに十三カ国の学生が集まるインドネシアのセミナー参加や、サークルの委員長を務めるなど自身身にトライすることで有意義な学生生活が過ごせたと感じています。社会人になってもこの気持ちを忘れず頑張っていきたいと思います。

さよなら・広島

経済学部留学生 ロク ホン イー

まだまだ寒いけれど、春の足音がすかに聞こえてくる。「ああ！卒業だ！」いよいよ卒業だと思ったら、わくわくするがちよっぴり寂しさが湧いてくる。

戦後、わずか四十年間に日本が廃墟から立ち直り、めざましい経済発展を遂げたことを不思議に思い、日本の経営に興味を持った。そして五年前、日本の大学で経済学を学ぼうと決心



経済学部の先生、事務の方、留学生との交歓会です

一九九〇年の日常

理学部 金行 健太郎

し、幸いにも広島大学へ入学できた。一年目は日本語があまりできなくて授業について行くのが精一杯で、アルバイトのため友達がほとんどできなかった。しかし、いつの間にか日本語になれ、友達もでき、彼らを通して日本の文化・日本のものの見方、考え方にふれることができた。このような経験は卒業後、国にかえっても活かされると思う。

四年間の大学生活は本当に楽しいものだった。青春時代を過ごした広島・大学・先生・事務の方々・友達のことをいつまでも忘れないだろう。ありがとう。

朝、私は広島市外にある小さな町の自宅から出かけ、その町の駅へと向かう。その駅からしばらく列車に乗った後、広島駅で降り、自転車に乗って東千田キャンパスへと向かう。大学へ着くとすぐ講義室へ行き、後ろの方に座る。授業中は、漠然と先生の話しを聞き、時々思い出したように板書をノートに写す。昼になるとそのまま講義室に居て、黙々と弁当を食う。午後も、午前と同様上の空で講義を聞き、一日の授業が終わると、後は日が暮れる前

に朝来た道をひたすら帰るのみである。これが私の一九九〇年の日常である。その前年も前々年も同様である。

一九九一年の日常は少し変化して、列車の降りる駅が西条駅になり、講義室に出る代わりに研究室で研究活動をするようになり、帰る時間が日の暮れた後になった。しかしそれほど大差はない。一九九二年、大学院生となって再び変わらぬ日常を過ごすのが私の望みである。今日も私は陸の孤島・西条キャンパスで研究活動が続ける。

学生時代の財産

医学部 小橋 俊彦

多くの人と知り合えたこと、これは大学生活を過ごした後の大きな財産である。大学に入学し右も左もわからなかった頃やクラブ内や学内行事において知り合った人達である。六年間も学生生活を送ると、楽しい事、嬉しい事、辛い事、悲しい事と様々あったが、それを分かち合い、励まされたり、助けられたりした。二年前、震災で実行委員長をした時に、知り合って一緒に仕事をした仲間があらぬ程感謝した。よく人は、一人では何もできな

いと言うが、その通りであり、物事を為し遂げるには人の助けは大事だと思ふ。「友」の存在は特に大切で、いつも何気なくいるものの、集まればものすごい力を発揮しうるのである。そのような人達と知り合えたこと、これはまさに財産である。

これから卒業試験、国家試験を乗り切り、医師になろうとする自分達にとって、学生生活で得たものとともにこの財産を持って様々な分野において、努力していこうと思うのである。

素晴らしい人達に巡り合わせてくれた
広島大学に感謝して

歯学部 大谷 裕 幸

私が広島大学歯学部を選んだ理由は、歯科医になるとは決めていたが、その他は自分の学力、広島出身である事、その程度であった。

そんな広島大学での人との出会いは、予想もしないくらい素晴らしいものであった。みな魅力的だった。

その中で、他学部の人と数多く知り合えたことは、私にとって非常にプラスとなった。価値観、将来の目標、すべてに異なる人間がいる。それが総合



大学の最もいいところではないだろうが。

タコ足大学だった広島大学が西条に統合され、ある意味でこれから真の総合大学になっていくように思われる。しかし現在でもそういう交流の少ない我が歯学部が、広島と西条とに離れて

学生生活を振り返って

工学部 久田 肇

広島大学に入学して早や四年が過ぎ、これからある者は大学に残り、ある者は社会へ出る。それぞれ自分の思う道に進むわけであるが、ふと四年間の学生生活を振り返って見たときどうであろうか。充実した学生生活を送った者、そうでない者、様々だと思ふが自分は後者であると思う。特に学業はさることながら、学生時代にしかできないこと、例えばサークル活動を通じて友達との輪を広げたり、旅行をして見聞を広めることが満足にできなかったように思ふ。それは金銭的な面と、社会勉強の面からアルバイトに精を出していたからでもあるが、この経験で多少なりとも社会へ出て、やっていける自信がつかったと思う。

社会へ出れば学生生活とは異なり、つらいことや悩みが多くなると思うが、四年間大学で学んできたこと、ま

しまうことで、更に単科大学のようになるのではないかと危惧されるのである。

最後に私を導き、励ましてくれたすべての人に、そして広島大学に感謝したい。

私はこの大学に来て本当によかった。

たアルバイトを通じて得たことを糧に精一杯努力し、広島大学の卒業生として恥ずかしくない社会人になろうと思



入学して間もなく行われたオリキャンにて



1991年5月研究室のみんなで九重山にのぼるところ

う。

最後に、四年間お世話になった諸先

四年間って、あつという間です

工学部留学生 ハズリン ファザイル ハローン

八八年の四月頃でした。

僕はマレーシア政府派遣留学生のハズリンと申します。現在工学部の四年生として頑張っています。マレーシアで高等学校を卒業して、マレーシアの日本語の学校で入学試験を受けてから広島大学に入学しました。それは一九

生方に感謝し、これからのご健康とより一層のご活躍を願ってやみません。

今でもまだ信じられないのは、自分が漢字圏の学生ではないのに日本の大学で全く日本の大学生と同じように授業をうけて、試験をうけてここまでこられて、四年間というのはあつという間のもので。日本語はマレーシアで一年半勉強をしましたけど、日常のための日本語ならじゅうぶんですが、大学のレベルならすくく不自由なものだと思っています。これにかわりあつて、最初同じ同級生とうまくつき合えませんでした。日本に来る前の「にぎやか」な性格は逆に「おとなしい」性格になってしまいました。幸いなことです。が六カ月後くらいにはだんだん友達が増えて、いっしょに勉強したり、いっしょに遊んだり、僕のもの性格にもどってきました。学校に行くのが楽しくなってきました。友人も増えて、時間の流れははやいなあとつくづく思いました。今やつと、工学部で勉強していると感じました。なぜなら毎日研究室の雰囲気はすくく楽しくてしょうがないです。みんなで力をあわせて実験をやります。当然、成功もあるし失敗

もありました。失敗のときみんなできつしよに考えて解決をします。だから「Team work」というものはいたいへん大事なものだと感じさせます。四年間学生生活を経験して、いいこともあつたし、当然よくないこともあつたけれ

卒業にあたって

生物生産学部 木崎 秀樹

て下さい。

最後にいろいろご迷惑をかけご指導いただいた先生方本当にありがとうございます。

月日が経つのは早いもので、大学生の四年間はあつという間に過ぎました。私なりに振り返ってみますと、一般教養の間は大学生になって解放感から生活は乱れ、毎日クラブに没頭する日々でした。西条に移ると専門課程に入り興味深い授業が多いと同時に試験も苦労しました。そして、あれやこれやという内に研究室配属も決まり、実験で忙しい日々が続きましたが、夏にはゼミのサンプリング旅行で山陰を回りいい思い出となりました。これから学生時代に学んだ事を教訓とし立派な社会人になるよう、しっかり自分を見つめて頑張っていこうと思えます。私の大学生生活に悔いはありませんが、今思うとやり残したこともあつたように思います。後輩のみなさん何か一つでいいから卒業する時に満足できるように大事な事を持ち決して無駄な時間を過ごす事なく充実した大学生活を送っ



山陰サンプリング旅行、途中各地の名所に寄り、あちこち車で走り回った

専攻科

修了

大学院生活をふりかえって

文学研究科博士課程前期 室山恭子

大学院は、自分の課題をもって研究に励む所である。目的を同じくする仲間と囲まれ、気が付くと私も勉強を「仕事」と言うようになっていた。大学院生になると、比較的自由に研究室・古

文書室を利用できる。その特権や一人暮らしの気儘さをよいことに、私は研究室で気の済むまで仕事をしたり、どうしても見たい史料があれば夜遅くからでも出かけて行った。それがまたすごく楽しかった。私の大学院の思い出には、暗い廊下と白み始めた窓越しの四角い空が染みついていて、

進学してからの私は、単なる知的好奇心の充足だけでなく、歴史を通じて自分が存在しているこの世界の成り立ちを知りたいと思うようになった。社会の動きに関心を向け、生活することにも一生懸命になった。大げさかもしれないが、歴史を学ぶことは生きてゆくことなのかなあと感じた。

私の大学院生活は、学会での発表と共に、自分の生き方を模索した二年間であった。



1991年の夏、修論準備のため訪れた山口市の今八幡宮の前にて

大学生生活を振り返って

文学研究科博士課程後期 玉岡秀人

文学部ということもあり、あまり大学には顔を出さない個人作業が多かつ

た。院に進んでからはますますそうであり、学部の人に比べて出歩くことも



宮島にて（左側）

少なくなつた。すきなことをやってきただけという思いもあるが、両極端の性質・行動が災いしてか、何かと失敗することが多かった。常時唯一の娯楽と言えは音楽だけになってきている。しかし金の無いときでもすこぶる豪奢であった。猫を溺愛した時期が二度あった。心残りなことといえば、共同作業にもっと力を入れるべきではなかったかということである。これは必要なことだ。

辛いなことに十年間を通して大きな病というものをしなかった。これは振り返ってみれば不思議な気がする。自分にも「猫の生活力」が備わっているのではないか、などとつまらないことをこの頃考えて喜んでいる。

広島大学で学ぶことができて

文学研究科博士課程後期留学生 マーヒル エルシディデーニ

私は私費留学生として広島大学に入学したが、幸運にも最初の年度から奨学金をいただけたので、アルバイトをせずに、研究に専念することが出来た。そのために、自由な時間が得られ、博士論文を無事提出することができた。博士の学位をとることが出来れば、自国エジプトに帰り、出身大学（カイロ大学）の文学部日本語科で教えることになる。広大で学んだ多くのことをカイロ大で生かしたいと思う。たとえれば、学生に沢山の情報を与え、単に暗



教室の先生方との歓談



札幌における第44回日本体力医学会に参加（札幌時計台の前にて）

私の大学院生活をふりかえって

教育学研究科博士課程前期 吉 富 壽 泰

記させるだけではなく、学生に自分の研究したいテーマを考えさせ、そのテーマについて、それをどのような方法で研究するか、どんな文献を参考にすればよいかを考えさせることである。学生が自分の頭を使って考えるよ

私の大学院生活を一言で表せば「短かった」。この言葉につきるであろう。

うに教育することは教育の良い方法であると私は思う。

最後にこの機会を利用して、五年間の長い間、色々と御世話になった沢山の方々に心から厚くお礼を申し上げます。

大学院に合格したらいろんなことを行いたいと考えていたものの、ほとんどの行えずに修士課程が終了してしまっただけで終わらない。

このように短く感じられた修士課程であったものの、日本各地で行われた様々な学会に参加できたことは大きな収穫であった。いろいろな大学の先生方のお話しを聞き、時には直接ご意見をいただける場合もあった。多くの先生方から研究に対する基本的な姿勢や専門的なアドバイスをうかがえたことは大きな励みとなった。

何かやりたいと試行錯誤しているうちに修士課程を修了する時期になってしまったが、学会活動以外にも貴重な経験をさせていただいた。大学院時代に得たこれらの知識や経験を、自分なりにアレンジして、これからの人生の糧にできるよう、これからも努力していきたい。

日本に留学して

教育学研究科修士課程留学生 郭 雅 芬

日本に来て、もうすぐ三年が経つ。ふりかえってみると、短い期間だったが、外国生活に慣れるまで、結構時間がかかったような気がする。衣食住の面では、幸いに台湾とあまり変わりはない、わりと早く慣れたが、精神的なショックはちよつと辛かった。日本

に来て初めてぶつかった壁は言葉の自由である。言いたいことが充分に言えない悔しさは今でもつくづく感じる。また、三年経ってもなかなか慣れなかったのは、やはり外人であることが意識された時の日本人の態度である。親切にしてくださったのをありがたく思い、冷たくされたのをすぐ忘れることは今になって、やつとできるようになったことである。日本で楽しく過ごすために、色々なことに慣れようとしてきた。そのうちに、苦勞もあつたが、自分がずいぶん成長したような気がする。留学三年間で体験した色々なことを宝物にして、大切にしたいと思う。

修了にあたって

教育学研究科博士課程後期 湯 沢 正 通

博士課程後期の三年間を振り返ると、西条キャンパスの移転に始まり、様々な行事の連続だったように思いま

す。それが単調な研究生活のアクセントとなり、また先生方の御指導と大学院の仲間達との交流のおかげで、大変



日本三景の「天の橋立」に負けずにトイレも綺麗に建てられている……京都・天の橋立にて



附属幼稚園のおとまり保育に
お手伝いとして、参加して (1990. 9. 12・13)

有意義で、充実した三年間を送ることができたように思います。私達の目標は、幼児の実像をとらえ、それを教育に生かしていくことです。この三年間

にその目標が達成できたとは思いませんが、附属幼稚園の園児をはじめ多くの幼児に接する機会を得、子どもを見る目を少しでも養うことができたと思います。入学当初より、幼児学の修士課程の第一期の修了生は皆、学界で活躍していることを聞かされ、私たちもまた、博士課程後期の第一期生として先輩方のような立派な研究者になりたいと願ってきました。博士課程後期の修了にあたって、今後、私たちの目標に近づき、願いを現実すべく、更に頑張っていく決意を新たにすることで

英語とカラオケと酒の日々

学校教育研究科修士課程 松岡博信

入学した途端、英語科院生四人は学会発表の重任に日々さらされ、講義の予習に追いまぐらされる生活が続いた。しかし人間は、忙しい時ほど遊んでストレスを発散しなければならない、と思いついた四人は、学会発表が終わった夜に大騒ぎすることを目標(?)に、良い発表をするべく日夜頑張った。そのかいあってか、二年間、四回に渡る学会発表は、全員無事に終えることができ、その夜は常にカラオケと美酒に囲まれた乱行をくり返したのである。



全国英語教育学会静岡大会参加の翌日
三保の松原にて (M2と) 90'年8月

広島大学に留学して、ちょうどまる三年になった。日本へ留学する前中国大連市にある遼寧師範大学に勤務していた。現代日本語文法などを教えていたが、日本語の難しさをいつも感じていた。特に、中国語にない助詞・助動詞に大変手を焼いていた。それで「日本語の助動詞についての研究」を修士論文のテーマとした。広島大学大学院では、国語に関する講義を受けるほか、修士論文に関する資料を集めたり、先学の研究論文を読んだりして、日本語の知識がだんだん増えてきて、いつも悩んでいる日本語の助詞、助動詞の使い分けについても、少し説明できるようになった。佐々木先生の熱心なご指導を受けて、この度の修士論文を書き上げることができた。私のこの三年間の留学生活には、先生方から親切なご指導、大学院生研究室の皆様から温かいご支援、国語科の学生の皆様から、



広島大学に学んで

学校教育研究科修士課程留学生 李志華

一生懸命努力し、成果があつた後の解放感。この両極端な学会の数日を経験して、私達は研究することの喜びとお互いの友情の交流の心地良さを知ることができた。日頃の苦勞は人前で発表する場を与えられたことよって報

われ、そしてその後のお互いの慰勞によつてさらに報われた。
勉学と交遊—この二本の柱で私達の生活は有意義に支えられ、充実した二年の大学院生活は英語とカラオケ漬けで、矢の様に過ぎた。

アンケートを調査するときのご協力をいただいた。ここでは、長いあいだ親切に指導してくださった佐々木先生、神鳥先生、檀上先生、森井先生、岩崎先生、森田先生と親切にしてくださいました学生の皆様から厚くお礼を申し上げます。



大学院を修了して、私は中国に帰ってからも、研究をうまずたゆまず続けてゆき、日本で学んだことを中国における日本語教育に活かし、中国と日本との文化交流に、微力ながら尽力したいと考えている。これからもご指導を切にお願いする次第である。

ありがとう 貴重な体験をさせてくれた教室よ

特殊教育特別専攻科 重政 信明

二十五年ぶりの学生生活はいいものである。先生方の味のある講義が私の

脳に新鮮な刺激を与え、脳を活性化してくれました。

今までの私の一人よがりな考え方を反省させ、逆に今までの経験から「うんうん」とうなづきながら受けた講義でした。二十五年前と比べると、記憶力は落ちていくが一味違った感覚で受けた講義でした。

また、職場では味わえない多くの経験をしました。一番の貴重な経験は多くの人々に出会えたことです。人生は「出会い」です。

大学の先生方、同じこの特専の教室で共に学んだ人々との出会いは私にとって忘れられません。

この風情ある教室で受けた講義、共に語りあったことは、いつまでも私の心の中に残ります。今は、もう一年間、同じメンバで、同じ先生から講義を受けた気持ちでいっぱいです。それは私だけのわがままでしょうか。

ありがとう、貴重な体験をさせてくれた教室。そしてさようなら。

大学院の女子学生

社会科学部研究科博士課程前期 天野 淑子

「無知は生きるための必要条件である。もしわれわれがすべてを知っていたら、一時間とは生に耐えられないだろう」という人がいた。

社会生活の中には様々な矛盾が存在する。そこで、法律の勉強を思い立ったのだが……学部生の頃、授業のなかで、教官の口からボンボン出てくる「人権無視」発言に、日本国憲法もさぞ赤面していることだろうと思った。

それでも、法学部の同級生や医学部生と共に、「脳死シンポジウム」を開催したり、「アーカンソー大学教官による『MORE ACTION FOR A CHANGE』という講演会(主催・広島大学法学会)を開催できた。中心となって活躍したのは、多くの女子学生であった。

修士課程にも数人の女子学生がいるが、修論や受験勉強にあまりにも忙し

これまで、そしてこれから

社会科学部研究科博士課程前期留學生 安 范 俊

「時は流れる水のように」という韓国の諺がある。最近になってようやくその意味が理解できるようになった。

思えば二年前、大学院入試を一月余り残し、このテストさえ無事に済めば、少しは余裕が出ると思った。しか



院生研究室前にて
(いつも励まし合いながら勉学する仲間達です)



平成3年10月経済学部留学生の見学旅行
瀬戸田町にて（後列右から2人目）

し、大学院にはいるやいなや指導教官から課せられる研究課題は私をそのよ

生きることは出会うこと

理学研究科博士課程前期 小 椋 一 徳

縁あって広大に来て二年になる。その間多くの印象的な出会いがあった。人との出会いも多くあったが、それ以上に旧理学部1号館との出会いは衝撃的であった。

受験で初めて広大に来た時、その建物との出会いがあった訳だが、被爆建物であることを知らず、戦後よくこれだけ手間のかかったものが建てられたなど妙な感心をしたことを覚えている。しかし一步中に入っただけで自分の誤りに気付くと共に驚きが沸き起こってきた。



旧理学部1号館の屋上で残念ながらちょっとピンボケ

うにはさせなかつた。授業はともかく、二週に一回あったゼミの発表は二年生の前期まで続いた。後期になってからは修士論文のまとめで頭が一杯であった。

今はやっと論文も一息ついて提出日待っている。その一息もつかの間、まだ博士後期の試験が待っている。

日本にきて三年目、自分が本当に日本に住んでいたのか不思議に思う時がある。しかし、このように時間に追われ、緊張の繰り返しだがこれからの人生ではないかと思われる今日この頃である。

四十五年の時を経てこうして目の前にあるということが奇跡の様に思われ、同時に志半ばでこの世を去って行かれた先輩方が居たことを想い胸が詰まったのである。そして現在の自分を観て、志新たにせねばと思っただが、

中国語、英語、日本語、ものを考える時 どっちを使うんであろう

理学研究科博士課程前期留学生 楊 衛

もう一月中旬に入って、修士論文を英語で書くかそれとも日本語で書くかという事さえ決めてない私は、今めちゃくちゃになった頭で思いだせる事がやはり言語というものである。

念いばかりが空廻りしているうちに早や修了学年となった。

最後に、この二年間本当に多くの方々のお世話になった。この場を借りてお礼申し上げたい。どうもありがとうございました。

大学院に入学してすぐで会った困難は言葉であった。日本語会話も大丈夫と思つたのに、聴講する時先生の授業が殆ど分からなかつた。日本語の教科書もカタカナいっぱいである。まずカタカナから相応の英語の単語に戻して、あとその単語の中国語の意味に着く、という方法でたくさん時間をかかって先生方の指導で研究が進んだ。

二年間近くの勉強で、大部分の常用術語を覚えた。でもカタカナから英語へ英語から母国語へのまわり道の考え方はいいのか悪いのかどつちでしょう。

広島大学での二年間の学習生活をし、物理専攻を勉強する同時に、私の日本語も英語を越えて第一外国語と



平成元年度卒業する前の研究室の送別パーティー

外で気づいたこと

理学系研究科博士課程後期 瀬戸 浩二

私は、大学院生活の四分の一を他の大学で過ごしてきた。そこで感じたのは「他の大学の人はすごい」というこ



1か月の調査船生活を終えて

とである。そう感じたのは、自分たちとは違うやり方、違う感性、そして違う雰囲気をもっており、それがすごく新鮮に思えたからである。しかし、悲しいかなその人もほとんどが井の中のかわずであることに気づいた。その人たちも私たちと同じく自分の周囲の環境に満足し、それより、外に接するとはしていない。私の場合、外に接することによってそれではいけないと気づいたが、結局は自分の殻を打ち破ることはできなかった。しかし、それに気づき努力したことは、大学院生活でもっとも重要で、大切なことであったと思う。私は、その機会を与えてくださった先生方にはすごく感謝している。

広大無辺

医学系研究科博士課程前期 竹川 晃司

はじめて、この地を訪れたころ前途多難という思いに押しつぶされそうになったことがある。けれども、この人達の支えが、わたしを研究という線から下車させることなく、終着へと導いてくれた。この大学院生活の間、何

度か行き詰まりを見せたり、引き返しそうになったとき、この支えが触媒となり様々な山を乗り越えてきた。ここでは、いろいろな支えに出会った。ここに載せた彼は、わたしに尽くしてくれた一人であり、彼の功績は大きく、



大学院生活を振り返って

医学系研究科博士課程 伊藤 公訓

大学院の研究生生活を通じ、科学することの楽しさ、喜びを経験することができ、幸せな四年間であったと思う。これも指導して下さった諸先生方のおかげであり、感謝の気持ちでいっぱいである。辛い基礎実験の後、やっとの想いで結果を出したあの興奮は忘れ得ぬものであり、まして諸先輩方に讀えられようものなら、この上ない喜びである。しかし医学研究である以上、病に苦しむ患者の痛みや、家族の苦悩を忘れるわけにはいかない。かつて結核がそうであったように、進歩する医学によって、ある日突然健康な体に戻れると患者は信じている。果して自分の癌研究の成果で、何人の人間が幸福に

この研究は彼なしでは到底無理であったと言っても過言ではない。なぜならこの研究における臓器提供者なのだからである。このように、感謝してもし切れない程、この人達の支えは目には見えない広く、限りのないものであった。私は、社会に出てもこの研究という仕事を続けていこうとしている。この仕事は、地味に進みゆく決してはやかな舞台ではない。しかし、一生の間に、創作的態度に出られる期間は僅か数年しかないのだから……。



なれるであろうか。大学院の四年間は楽しい四年間であると同時に、何か切

ない四年間でもあったような気がする。

広島大学での出会い

医学系研究科博士課程留学生

ザヒド ホセイン ジョーダー



その他第二内科の諸先生方にとっても助けていただき私の研究を成功に導いていただいた事に感謝致しております。この四年の滞在期間、日本や日本の方々に対しての印象はとてすばらしいものでした。私は誠実で勤勉な方達にお会いできとても嬉しく思っています。その人々は愛国心と献身の心を持っていました。

私はこのジャーナルに文章を書かせていただく事を嬉しく思います。私が広島大学第二内科に留学したのは一九八七年十月でした。私は日本の初めての冬が強く心に残りました。その時私は雪がいつぱい降るのを初めて見て嬉しかったです。

山木戸道郎教授をはじめ頼岡先生、

書物を読んだだけでは分からない沢山の教訓を与えていただきました。考えてみると私はとても幸運でした。なぜなら留学生として、沢山の日本人や様々な国の留学生と知り合うことができたからです。私はとても貴重な勉強をしました。この経験を将来母国の為

に役立てたいと願っています。

夢の中で

歯学研究科博士課程 小原 勝

ふと目が覚めた。時計を見ると午前五時、カーテンの隙間から朝のまばゆ

い光が射し込めてくる。辺りの空気は凍てつくようにじつと緊張していた。

その日は妙に目が冴えて、もう眠れそうになかったので、窓を開け朝のすがすがしい空気を入れ、眠け覚ましのコーヒーを入れた。

思い起こせば今から四年前、六年間の学生生活に飽き足らず、さらに大学院進学を決心したのであった。コーヒーを飲みながら、四年間の地味で泥臭い研究生活を思い出した。準備に二カ月、そして実験、結果はそのまた一カ月後、そして失敗、また始めからとつらく苦しい日々であったが、自らの疑問を自らの手で答えに導くという小さな喜びも味わった。神が与えた永遠のテーマ「生命」の一部にでも関与できたことで有意義な学生生活だったとふり返る。しかしここは一つの通過点に過ぎない。これからの未来に幸あれとコーヒーを「ぐいっ」と飲み干した。今日は卒業式だから……。

西条に住みました

工学研究科博士課程前期留学生 アキルデイン ドニ

西条という町の名前はインドネシアのジャワ人にとって覚え易い名前です。なぜなら、ジャワ人には例えばパイジョヤカルジョヤベジョなどのように、よく似た名前があるからです。西条の環境はインドネシアの小さい町ともよく似ております。静かな田園ばか

りです。この環境は勉強のためにはとても良いですが住むためにちょっと不便です。西条の町と広大キャンパスとは離れすぎていて、遊ぶところもありませんのでとても困ります。独身の留学生にはとても寂しく、楽しみがないのです。



学会発表で訪問したクラーク像の前で（札幌）



研究室の忘年会にて

居住環境以外はともとても楽しい思い出がたくさんあります。ご指導いただいた先生方は親切で勉強については困ったことはありません。日本人との交流も楽しい思い出の一つです。留学生にとって日本留学は勉強のためだけではなく日本人の良い生活と性格を知ることと留学の目的です。留学生と日本人の交流はそのため大変役立ちました。ともあれ、私はインドネシアに帰っても、日本の先生方や友達との交流を絶やさないようにしたいと思っております。

修了に際して

工学研究科博士課程前期 福田 政典

大学院博士課程前期を修了するにあたって六年間の学生生活を振り返ってみようと思います。

私にとつての学生時代は、他の人にとつてもそうであると思いますが、自己の人格の確立の場であり、知識の習得の場であり、また社会に出るまでのモラトリアムの期間であったと言えます。そのような期間で私が得た最大の財産は、さまざまな人と知り合い、話をする機会が得られ、特にサークル活動を通じて他学部の人達とも交流を持

つことが出来たことです。これは総合大学の学生の強みであると思います。

しかし専門課程ではそのような機会ほとんどなく、残念に思います。ただその他の学生生活を振り返ってみますと、大学生活での経験を社会人になつて役立てようなどと言えるほど立派な行いはしていませんが、それでも自分なりに他の人とは違った学生生活を送ることが出来、有意義だったと思いたいと思います。

“生かされている”
という認識を大切に

工学研究科博士課程後期 善本 裕之

研究に携わつて六年間が経つた。はじめは何もわからず、先輩の言うがままに動いていた。それが、先輩ができ、先輩と呼ばれる頃には自分で何をすべきかを考えられるように成長している。そして、いつの間にか後輩から頼られていることに気がつく。研究においても、人間関係はとても大切である。

“自分は一人で研究できる。”という人がいるが、僕はそう思わない。研究の対象は、人ではないが、人間関係が基礎となっている。研究はえてして自分一人ではできないような気がするが、先輩、後輩という人間関係の中にあり、教え、教えられる、はじめて自分の研究ができるのである。つまり、自分は、周りの人達により、生かされている”のである。

今後、社会に出ても、自分は“生かされている”という認識の上で、自分らしい独創的な研究を行うことができ

たらしいなと考えている。最後に、研究のみならず、辛い時、悲しい時に支えてくれた人達に大変感謝する。



大学生活最後の1年間と一緒に過ごした仲間たち

さよなら、広島大学

工学研究科博士課程後期留学生 胡 建 英

光陰矢のごとし、日本に来てもうまる三年たった。来た頃のが今なお

記憶に生々しい。私は大学から修士まで環境の分野で勉強と研究の道歩ん



ソフトボール大会で研究室の皆さんとハイ、ポーズ!

できたが、環境技術の基礎である分析技術に非常に興味を持ち、日本での留学はそれを研究方向とした。日本語が

二年間の修士課程を振り返って

生物圏科学研究科博士課程前期 熊本雄一郎

私の大学生活を振り返ってみると、修士課程の二年間は学部生の四年間に比べて充実していたように思う。修士課程では、二年間を通じて一四〇日余りの間、太平洋の研究航海に参加し、海洋科学の研究を行ってきた。船上での生活は休日がなく、仕事も非常にハードであるが、どんなに苦しくとも逃げだすことはできない。分析がうまくいかず、明け方近くまでかかってしまうことも度々あった。しかし、辛い



研究調査船白嶺丸において赤道を通過した時 (1990. 9. 25後列右から3人目)

分らないし研究テーマも全く違うので、当初は博士コースの三年間で学位が取れるかどうか心配だった。先生方の親切な指導と研究室のみさんの熱心な協力のおかげで、研究は順調に進んだ。今年三月に博士課程後期を修了し、学位を取得する予定である。これで私の学生生活に終止符が打たれる。この三年間、いろいろな苦労や辛いこともあったが、広島大学は第二の母校として私の心の中でずっと美しく生き続けるでしょう。

ありがとう、広島、広島大学! ありがとう、恩師の木曾先生、広川先生、そしていろいろお世話になったみなさん! さよなら!

ことばかりではなかった。船の寄港地の南太平洋の島々では海外旅行気分が味わえたり、何と言っても多くの人と知り合う機会に恵まれた。船上の分析などとともに苦労した同年代の学生とは友人になることができたし、船員の

広島での一〇年間でふりかえって

生物圏科学研究科博士課程後期 生城真一

高知の田舎から広大に入学してはや一〇年。大学とは「なんでもできるが、なにもしなくてもよい所」という印象を受け、本当に意義ある大学生活が送れるであろうかと不安であった。学部の三年間はクラブ活動と勉強をほとんどにやってハッキリした目標もないままに過ごしていた。

そんな自分が変わったのは四年生の卒業研究に入り、これまでの自身の勉強とは違う「研究する、誰も知らないことを知る」という楽しさを知ってからであった。(しかし、このとき苦しさも伴っているとは知らなかったのだが……)。ここまでの道のりは決して楽なものではなかったけれど、こういう場と人に恵まれて今このときしかできない自分の好きなことができ本当に好運だったと思っている。

移転と共に東千田町キャンパスはな

皆さんとの共同作業や、会話の中で学ぶことも多かった。特に「それぞれの専門分野の第一線で活躍されている先生方と(時にはビールを片手に)研究について話し合うことができたことは私にとって貴重な体験であった。



1990年日本生化学会(大阪)において研究発表した時の写真